

氏 名 高橋 龍夫

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第247号

学位授与の日付 平成29年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 芥川龍之介文学におけるモダニズムの諸相

論文審査委員 主 査 教授 谷川 恵一
准教授 青田 寿美
准教授 野網 摩利子
教授 松本 常彦 九州大学
名誉教授 宮坂 覺 フェリス女学院大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本研究は、芥川龍之介の文学について初期から晩年までの諸作品を対象に分析し、その表現意識を探るとともに、同時代の欧米モダニズム文学の特徴と照らし合わせながら、芥川文学の現代的意義について再評価することを目的とした。

序章においては、芥川文学を概観しその方法的特徴を確認した上で、欧米モダニズム文学との関連性について問題提起をした。欧米モダニズム文学とは、旧来の形式や思潮を否定しつつ、20世紀の思想を取り入れて新たな創造の可能性を多彩な形式で実験的に試みながら、そこに第1次世界大戦期前後の同時代的批評性と時代の動向としての内面的不安や狂気といったものを映し出そうとした表現営為といえる。こうした欧米モダニズム文学の特性は、従来、芥川文学研究において看過されてきたが、芥川龍之介文学の諸相を照らし出す有効な指標となりうると仮定できるのである。

本論における第1章では、1915、16年の初期作品を対象に、創作意識や生成過程を同時代言説との相関性から分析した。欧米ジャポニズムの視線を新たに隅田川に反照させて近代的な錦絵の世界を描出する「ひょっこ」、『今昔物語集』を典拠にフォービズムや生の哲学を踏まえて一元論的世界観に下人を解放しつつも、第1次世界大戦期の混迷する時代への芸術的道標を模索する「羅生門」、ベルクソン哲学を骨子に醜悪な人間同士の対立を回避し、自然との調和的照応を日本画的な美的瞬間に凝縮させた「鼻」、欲望の構造を軸に近代人間中心主義の相対化を試みる「芋粥」、大正期の観念的かつ排除的なコスモポリタニズム言説への批判的視座をストリントベルクによって提示した「手巾」と、いずれも伝統的な典拠や同時代の社会的動向を踏まえつつ、そこに最先端の思想や芸術思潮を導入して新たな美的世界を構築し、同時代に対する批評的なテーマを提起しており、そうした作風の特質には欧米モダニズム文学の端緒をみることができる。

第2章では、1918年から20年にかけての作品群について西洋19世紀末芸術の受容や第1次世界大戦期の思潮との関係から同時代的意義を考察した。『今昔物語集』や地獄変図を典拠に、『地獄の門』の作者ロダンの中世憧憬や国家権力への反抗といった芸術意識を踏まえつつ同時代芸術言説に連なっていく「地獄変」は、伝統回帰と近代批判の両義性に加えメタフィクションを表象する点でも欧米モダニズム文学の要素を多分に備えた作品といえる。また、典拠の宗教性を解体し美の自立性と倫理性から再創造した「蜘蛛の糸」、人工と自然、軍事都市と寒村という明瞭な対比構造を背景に民衆に芸術的な光を当てた「蜜柑」、第1次世界大戦直後の世界的動向や芸術思潮を背景にボードレー「万物照応」の美的瞬間を再創造して人間存在の普遍性を見据えた「舞踏会」、現代女性のアイロニカルな現実を象徴的な手法で時宜的に問題提起した「秋」と、いずれも時代精神の課題を基盤におきながら人間性回復としての美的瞬間を創出しており、そうした表現者としてのスタンスは欧米モダニズム文学の事情に多分に通じている。

第3章では、新聞社特派員としての中国滞在を挟んだ1920年代前半の芥川文学の作風の変化を検討した。中国古典を典拠としつつ、第1次世界大戦後の社会状況を背景に人間性回復を標榜する〈物語性〉を配した「杜子春」は、「リクリエーション」(丹治愛『モダ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

ニズムの詩学』)としてのモダニズム文学の特性を有している。中国滞在の実体験と原敬暗殺事件の報道記事を契機に、第1次世界大戦前後の国際的言説空間を背景とし『今昔物語集』の典拠を歴史的共時性による語りと騙りの錯綜する多元的視点の物語に再創造した「藪の中」は、構成主義やキュビズムに通ずる手法でもあり、欧米モダニズムの特質に直接的に連なっている。「トロッコ」は、少年期の回想形式を軸にして、近代日本の鉄道の拡張期をモチーフに不況下の労働者の疎外された主体の内面を表出する手法が用いられている。「報恩記」は、南蛮文化隆盛期の国際性豊かな時代設定に置き換えつつ大正モダニズムの光と影を反映させたモダンな意匠に彩られた小説といえる。「庭」は、伝統と近代の狭間に存した明治期の土壌的苦闘の空転的営為を旧家の庭に映じており、芥川文学におけるモダニズム的〈身振り〉の特性をめぐる自己言及的な作品として再評価できる。いずれも欧米モダニズム文学に通じる要素を備えつつ、その方法的変容や認識的深化の様相として捉えることができる。

第4章では、1927年の晩年の作品を対象に、表現意識や創作方法の観点からモダニズムの末路の特質とその基層を捉えた。主人公の意識に即して描写する岩野泡鳴五部作の手法に通ずる「玄鶴山房」、狂気から近代社会を逆照射する「河童」、モダンな世界と自己との関係性の解体を企図する「歯車」、意識と無意識との併存を美的世界として共同主観的に表象する「蜃気楼」と、いずれも外界と過敏に感応する表現者の究極的な創作営為のスタンスとして捉えられ、詩的精神を介した未創造への帰還と新たな創造の可能性の実践をモダニズムの末路における新たな指標として顕在化させている。さらに「或阿呆の一生」の「七画」によるゴッホの眼に共鳴する「彼」の心象描写を契機に、人間と自然との交感や調和を軸とする芥川文学の自然観の特徴とその可能性を検討した。

終章において、芥川文学の諸相は、歴史的、時代的文脈に遡及しつつそれをいったん解体し、最新の思潮と多彩な手法で新たな世界を構築して同時代的な批評精神を真摯に指標する創作営為として捉えることができ、同時期の欧米モダニズム文学における解体から再創造への道筋を探る表現者のスタンスに準えるものと結論づけた。しかも晩年にはモダニズムの手法自体を相対化し小説の解体现場に介在する詩的精神の営為自体を表象させるに至り、表現者として、1910年代から20年代の時代の動向を鋭利に反照するモダニズムという実験的方法に多分に自覚的であったことが指摘できる。さらにその基層には人間と自然との照応による調和的世界を標榜する一元論的世界観の認識も厳存しており、こうした芥川文学の世界観は、今日、各国語の翻訳を通じて非西欧圏における世界文学として、20世紀の再検討と新たな価値観の可能性を示唆する現代的意義を十分に有しているといえるのである。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

高橋龍夫の学位請求論文『芥川龍之介文学におけるモダニズムの諸相』は、1910年代から1920年代末にかけての芥川の文学的営為を、同時期にヨーロッパを中心に展開された芸術文化運動と連動したモダニズムの視点から捉え返すことで、芥川を世界文学の中に位置付けようとする、日本文学研究サイドからの意欲的な論考である。

高橋は、モダニズムの特質を、近代の人間中心主義の相対化と前近代の称揚、都市化による社会・生活の変容がもたらした新たな表現様式の追求にあると概括した上で、その圏域を、モダニズムに先駆しまたはその周辺にあったボードレール、ゴッホ、ロダンなどにまで拡張しつつ、モダニズムを構成する諸要素を芥川のさまざまな作品に確認していこうとする。論文タイトルに「諸相」とある所以である。

最初期の「ひよつとこ」から晩年の「或阿呆の一生」にいたるまでの芥川の19の作品を発表順に取り上げ、4章に分けて論を進めている本論考は、ヨーロッパの文学・芸術・哲学テキストと芥川の直接的な関係を論じるものと、両者のダイレクトな関係をたどるのではなく、芥川をモダニズムの観点から分析し再評価しようとするもの、という二つの系列からなっている。

「鼻」とベルクソン、「地獄変」とロダン、「舞踏会」とボードレールなどを論じた論考が前者であり、「藪の中」の表現方法が表現主義と通底することを指摘し、「蜜柑」に第一次世界大戦への反応を読み取ってみせる論考が後者である。

これらのうち、芥川の読んだ欧米の文学・芸術・哲学テキストとの直接的な関係を論じた前者の系列の論考は、芥川が読んだ書物を書簡や旧蔵書によって確認し、芥川にボードレールやベルクソンなどがどのように活かされているかを具体的に明らかにしている。

鹿鳴館で踊る人びとの形容に用いられた「蛾」という言葉が『悪の華』に収められた「灯台」という詩の英訳によっていることを明らかにして、ボードレールの共感覚的な表現志向の受容が光と匂いと音が渾然となった表現として結実したことを指摘した第二章三「舞踏会」の方法」、および、「傍観者の利己主義」という「鼻」の語り手の言説が芥川が読んでいたと推定されるベルクソンの『笑い』の英訳中の「a degree of egoism」と対応していることなどを指摘して、主人公の虚栄心や周囲の人間の利己主義とベルクソンの『笑い』の問題構成との相関を論証した第一章四「鼻」におけるベルクソン哲学の陰影」がそれである。その死去が大きく日本に伝えられたロダンの中世憧憬と「地獄の門」制作が、芥川の『今昔物語集』などの平安末期の物語への傾倒と「地獄変」の主人公である芸術家の造型に与えた影響を論証した第二章一「芥川とロダン」、および、「牛車の轍」を「逞しい天才の仕事の痕」と眺める語り手の視線にゴッホの「鳥の飛ぶ麦畑」を重ね合わせることによって芥川晩年の表現世界の独自性を捉えた第四章三「蜃気楼」論」も、特定の芸術家との関係を扱ったものとしてこの系列に含めてよい。

丹念な考証と緻密な作品の読み込みが一体となったこれらの論考は、典拠論の面において従来の研究を大きく前進させるとともに、芥川を世界的な視野から捉え直した研

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

究として、高いオリジナリティーを有している。

一方、芥川の作品をモダニズムの観点から分析する系列の論考は、これまで主に作家の個人史や国内の文学思潮との交渉という文脈で行われてきた研究を、ヨーロッパとアジアをまたいだ世界大戦が戦われるという状況に象徴的に示されるグローバルな共時性の下での、都市を中心に展開する文化事象のシンクロニシティ（意味のある偶然の一致）の探究へとシフトさせようとしたものである。

語られた領域を隈取ることによって語られなかった領域を指し示そうとする「藪の中」における語り的手法にゲシュタルト心理学に通底する視野の転換を読み解こうとした第三章三「藪の中」における「語らない」ことへの一視点」や、「精神病院」に収容された男が河童の国での体験を語る「河童」のモチーフと、眠り男を操った殺人という狂人の妄想を映像化したドイツ表現主義の映画「カリガリ博士」との相同性を指摘した第四章二「河童」、「歯車」におけるモダニズムの反照」は、ヨーロッパのモダニズムの受容ではなく、モダニズム的な、またはモダニズムを生み出した文化事象の共起を扱い、それらを鋭敏に捉えて作品とした芥川の方法を照らし出している。第一次世界大戦を契機として拡張されつつあった近代軍事都市横須賀と貧しい少女との対比に、未曾有の戦禍に反応したヨーロッパ文学との同時代性を確認しようとした第二章三「蜜柑」における手法」や、都市労働者の疎外された内面の表出として作品を捉えようとする第三章四「トロツコ」の方法」も同じ系列の論考であり、いずれも説得力のある新たな読みを提示し、芥川研究の方向を転換させる力を持っている。

以上、モダニズムという観点を導入することによって今後の芥川研究の展開に大きく寄与することが期待される本研究であるが、芥川におけるモダニズムの検出・解明という方向に終始するあまり、全体として、そもそもモダニズムとはどのようなものであり、そのモダニズムの中に芥川をどう位置付けるのかという問題が拡散してしまっていることは、本研究の課題である。ボードレールは象徴主義の先駆となった詩人であり、ロダンやゴッホも普通はモダニズムに含めることはない。高橋は、象徴主義・後期印象派・世紀末芸術などが20世紀のモダニズムの母体となっているとしてモダニズムを拡張するのだが、それならば、芥川が親炙したイェーツに触れないのは本研究における欠落となるだろう。丹治愛やマイケル・ベルなどのモダニズム論からモダニズムの特質についての指摘をコラージュし、それらの諸要素に連なり類縁するものを逆にモダニズムに取り込んでいこうとする高橋のスタンスは、その文化事象のグローバルなシンクロニシティという視点とともに、本論考のテーマであるモダニズムの輪廓を曖昧なものとしてしまっていると言わざるを得ない。

このように、専門研究者の間でもその論点に大きな幅があるモダニズムを抜しつつ、それを用いて芥川の多様な作品の特質を解明するという高橋の試みは、なお乗り越えるべき課題を残しているが、芥川の作品の世界的な受容をヨーロッパを中心とする文化的・社会的事象との関連から解明しようとしたことは高く評価されるべきであり、同時代の幅広い言説を踏まえながらなされている個々の論考は高い完成度とオリジナリティーを有している。これらのことから、審査委員会は、全会一致で、高橋の本論文が博士の学位を授与するに値するものであると評価する。